

Section

01

Power Automate for desktopとは

ここで学ぶこと

- ・ RPA
- ・ ローコード
- ・ エディション

ここでは、Power Automate for desktopの特徴や使うことのメリットについて解説します。また、Power Automate for desktopには、有償/無償のものがあり、いくつかのエディションが用意されているのでそちらについても解説します。

1 Power Automate for desktopとは

重要用語

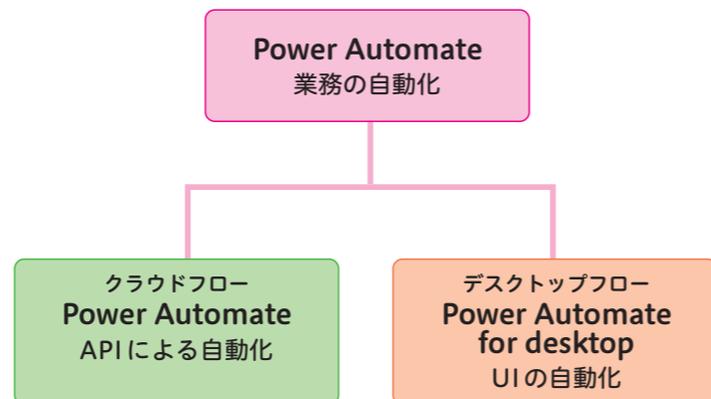
RPA

RPAとはRobotic Process Automation(ロボティック・プロセス・オートメーション)の略称であり、パソコンで行う操作をロボットに行わせる手法のことを指します。ロボットといっても工業用ロボットのような実体のあるものではなく、パソコン上で動くソフトウェアのことを「ロボット」と呼びます。

Power Automate for desktopとは、マイクロソフトが提供しているPower Automateのロボティックプロセスオートメーション(RPA)機能の1つであり、主にパソコンのデスクトップ上で行っていることを自動化するためのツールのことです。

Power Automate for desktopやPower Automateといったツールは、「Microsoft Power Platform」というクラウドサービスに属しています。このクラウドサービスは、いろいろな機能やアプリケーションを「ローコード」で開発・運用することを目的としたサービスの総称です。サービス内にはPower Automateのほかに、Power BI、Power Appsなどの製品があります。

本書では、これらのサービスの中でもPower Automateの機能であるPower Automate for desktopを解説します。Power Automateは主に「クラウドフロー」と「デスクトップフロー」の2種類のフローに分類されます。機能的な差については以下のようになっています。



あらかじめ用意された500以上のコネクタを使用してワークフローを自動化

Power AutomateのRPA機能WebブラウザやWindowsアプリなど画面操作を中心に自動化

重要用語

API

APIとはApplication Programming Interface(アプリケーション・プログラミング・インターフェイス)の略称であり、別々のソフトウェアが相互に情報をやり取りできるように設けられたインターフェイス(窓口)です。

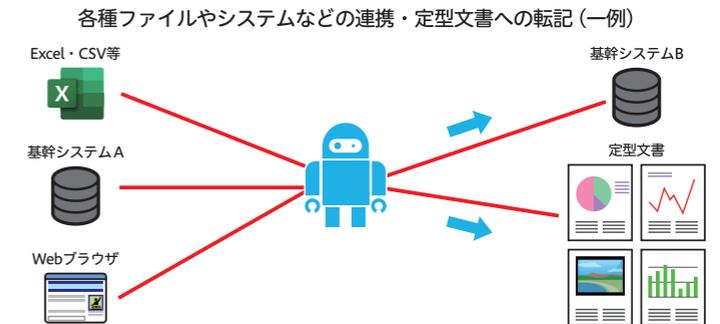
2 RPAでできること

重要用語

ローコード

ローコードとはシステム開発の手法の1つです。一般的なシステム開発は、特定のプログラミング言語を用いて細かく処理内容を組み上げていきます。一方ローコードはあらかじめツール内に用意されたパーツをもとに組み上げていくので、0から開発するプログラミングと比べ、「かんたんに」「すばやく」開発できます。しかし、ローコードで開発したシステムを拡張したいときにはプログラミングが必要となる場合があるため注意が必要です。

RPAは「ローコード」で開発することができるため、比較的かんたんに定型業務を自動化・効率化することができます。たとえば定型文書の作成やシステムAからシステムBへの連携などは、この定型業務に該当します。また、インターネットなどの環境が整っている場合は24時間365日動くことができます。そのため、大量データを扱う業務やある一定のものを監視しながら行う業務に向いています。



3 使用条件について

Power Automate for desktopでは使用するうえで大きく分けて3つの種類分けがあります。

- ① **Microsoft アカウントの種別について**：アカウントには個人アカウントと組織アカウントの2種類があります。本書のSec.04で作成するアカウントは個人アカウントになります。
- ② **無償版/有償版について**：Power Automate for desktopは無償で使用することができますが、Microsoft アカウントが組織アカウントである場合はPower Automateの「アattend型 RPA のユーザーごとのプラン」を契約することで有償の機能を使用できるようになります。
- ③ **Windowsのエディションについて**：Windows 10、Windows 11であれば使用できるPower Automate for desktopですが、Windows HomeやWindows Proといったエディションによってレコーダーの一部が使えないなどの機能制限がある場合があります。これらを踏まえたうえで下記のような違いがあります。

	個人アカウント	職場または学校アカウント ※組織アカウント	組織プレミアムアカウント ※有償版組織アカウント
フローの保存先	個人のMicrosoft OneDrive	組織内の既定環境のMicrosoft Dataverse	環境全体のMicrosoft Dataverse
フローの作成・編集・実行	○	○	○
基本的なアクションの利用	○	○	○
特別なアクションの利用 ※SharePointアクション	×	×	○
フローの共有・共同開発	×	×	○
フローのスケジュール実行	×	×	○
フローの管理・ログ	×	×	○
利用権限設定	×	×	○
Power Automateとの連携	×	×	○

本書の解説は「組織アカウント」「無償版」「Windows 10」で行います。それ以外の環境では一部画面構成などが異なる可能性がありますのでご了承ください。

Section

06

自動化の一連の流れを理解しよう

ここで学ぶこと

- ・フロー
- ・アクション
- ・作成手順

PADでは「フロー」と呼ばれる自動化プログラムを作成することができます。本章ではまず例としてレコーダー機能を使って1つのフローを作り、その効果を実感してもらいます。まずは、自動化の一連の流れを見ていきます。

① PAD 利用の流れ

重要用語

フロー

RPAではプログラムのことを「ロボット」と呼ぶことがあります。このロボットのことをPADでは「フロー（あるいはデスクトップフロー）」と呼びます。フローはアクションなどの組み合わせによって業務を自動化・効率化する一連の流れを指します。このフローは基本的にアクションを上から順番（登録順）に処理していきますが、繰り返しや条件分岐などを設定することで自分の考えた流れでフローの処理を進めることができます。

重要用語

アクション

アクションとは、PADでExcelやWebブラウザなどを操作するにあたって、事前に用意されているプログラムのパーツのことを指します。標準機能としてたくさんのアクションがあり、これらを自由に組み合わせることによってフローを作成します。

自動化の一連の流れは、以下のとおりです。STEP2のアクションの登録・設定は1つのアクションだけでなく、複数行うのが一般的です。またその際、登録したアクションを複製して設定を一部変えるなど、アクションの登録・設定を効率的に行うこともあります。さらに完成したフローを編集して、別のフローとして活用するといったこともよく行うので、本章ではSTEP5としてその工程も解説しています。



② 本章で解説するレコーダー機能

解説

レコーダーとは

レコーダーとはヒトが行った操作をPADが記録し、アクションに変換する機能です。普段と変わらない操作をするだけでアクションの設定ができるため、システム面のことを考える必要がなく、かんたんにRPA化が実現できます。

本章では、レコーダー機能を利用した自動化を解説しています。具体的には作成したフローを実行すると、指定したURLのWebページが自動で開き、同時にそのWebページのタイトルを記載したメッセージボックスが表示されるというものです。



③ レコーダー機能の使用用途

補足

使用時のポイント

右のようにレコーダー機能にはメリット・デメリットがあり、中でも誤操作・誤記録は非常に発生しやすいです。そこでレコーダー機能にある2つの機能を押さえておきましょう。

①一時停止

もし記録している途中で別のことをする場合は、[一時停止]をクリックすることで記録されなくなります。

②リセット

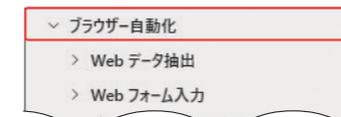
誤って本来記録する予定ではなかったものを多数記録してしまった場合や、誤った手順を記録してしまった場合は[リセット]をクリックすることでレコーダーの記録を最初からやり直すことができます。



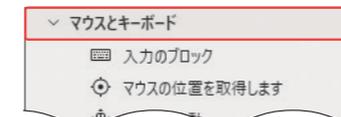
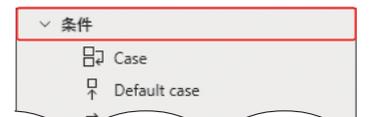
レコーダー機能はヒトが行った操作をそのまま記録できるというメリットを持つ反面、デメリットとしてレコーダー機能ではできないことも存在します。そのため、メリット・デメリットをよく理解してから活用することが重要です。

メリット	<ul style="list-style-type: none"> ●ヒトが行った操作をそのまま記録できるため、直感的にフローを作成することができます。 ●どのアクションを使用してよいかわからないときに、レコーダーで記録することでフロー内にアクションを配置できます。 ●WebブラウザやUIオートメーション(P.74参照)など、操作対象によって自動でアクションを判別してくれます。
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ●レコーダーでは記録できないアクションが存在します。例) Excelを操作した場合、ExcelグループのアクションではなくUIオートメーショングループのアクションになります。 ●上から下へ流れる単純なフローは作成できるが、条件分岐や繰り返し処理などはレコーダーでは記録することができません。 ●マウスクリックやキーボード入力など1つ1つ細やかに記録されてしまうため、不要な操作まで記録されてしまうことがあります。

記録できるアクションの例



記録できないアクションの例



07

フローを作成しよう

ここで学ぶこと

- ・フロー
- ・レコーダー
- ・Webブラウザ操作

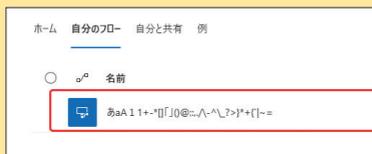
Sec.06でも説明したとおり、ここではまず新しいフローを作成し、続いてレコーダー機能を使う設定を行います。複数の画面で設定することになりますが、手順どおりに進めていけばかんたんに自動化を実現できます。

1 新しいフローを作成する

解説

フロー名の付け方

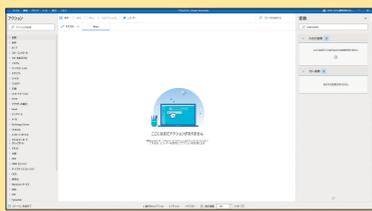
フロー名には半角全角問わず日本語や英数字、記号などあらゆる文字が使用可能です。一目でフロー内容が把握できるような分かりやすいフロー名を付けることを推奨します。



補足

画面構成について

【フローコンソール】画面と【フローデザイナー】画面の画面構成については、第3章を参照してください。



- 1 P.26を参考にPADを起動し、【フローコンソール】画面を表示します。



- 2 【新しいフロー】をクリックします。



- 3 【フロー名】に「今かんテスト」と入力し、

- 4 【作成】をクリックします。

- 5 新規フローが作成されると同時に、



- 6 【フローデザイナー】画面が立ち上がります。

2 レコーダー機能を使う

補足

Webブラウザの起動について

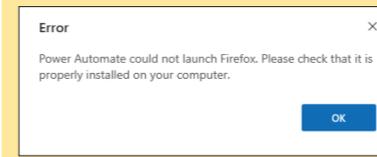
Webブラウザ操作をレコーダー機能で記録する際は、事前にWebブラウザを開いておく必要はなく、手順2のように【レコーダー】画面を開き、ここからWebブラウザを選択して開くことが可能です。Internet Explorer以外のWebブラウザを利用する際は、各Webブラウザの拡張機能をインストールする必要があります。インストールは、【ツール】メニューからインストールページにアクセスすることで行います。



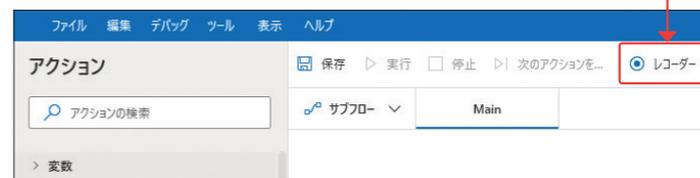
補足

記録可能なWebブラウザの種類

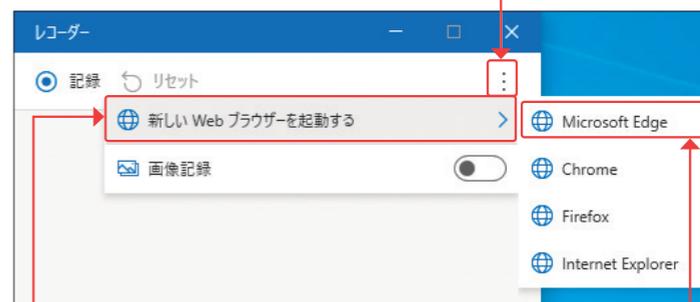
レコーダー機能で記録可能なWebブラウザは「Microsoft Edge」「Chrome」「Firefox」「Internet Explorer」の4種類です。手順4でWebブラウザを選択するとURLが設定されていない真っ白なページが表示され、【記録されたアクション】にWebブラウザの起動アクションが追加されます。なお、手順4では拡張機能がインストールされていないWebブラウザも選択できますが、拡張機能をインストールしていない場合は、処理を記録しようとする拡張機能インストールを促すダイアログボックスが表示されます。



- 1 【フローデザイナー】画面で【レコーダー】をクリックします(【レコーダー】の文字を確認したい場合は、全画面表示にするか、ウィンドウサイズを大きくします)。



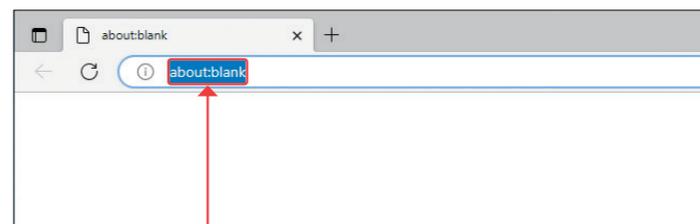
- 2 【レコーダー】画面が開くので、⋮をクリックし、



- 3 【新しいWebブラウザを起動する】をクリックして、

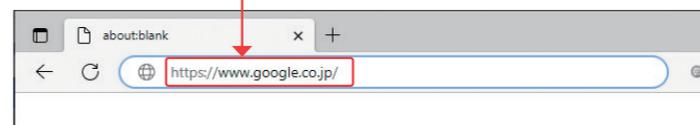
- 4 【Microsoft Edge】をクリックします。

- 5 「Microsoft Edge」が起動して、真っ白のページが開かれたことを確認し、



- 6 Microsoft Edgeのアドレスバーをクリックし、【Delete】などで「about:blank」を削除します。

- 7 アドレスバーに「https://www.google.co.jp/」と入力し、【Enter】を押します。



Section

11 フローコンソールを
知ろう

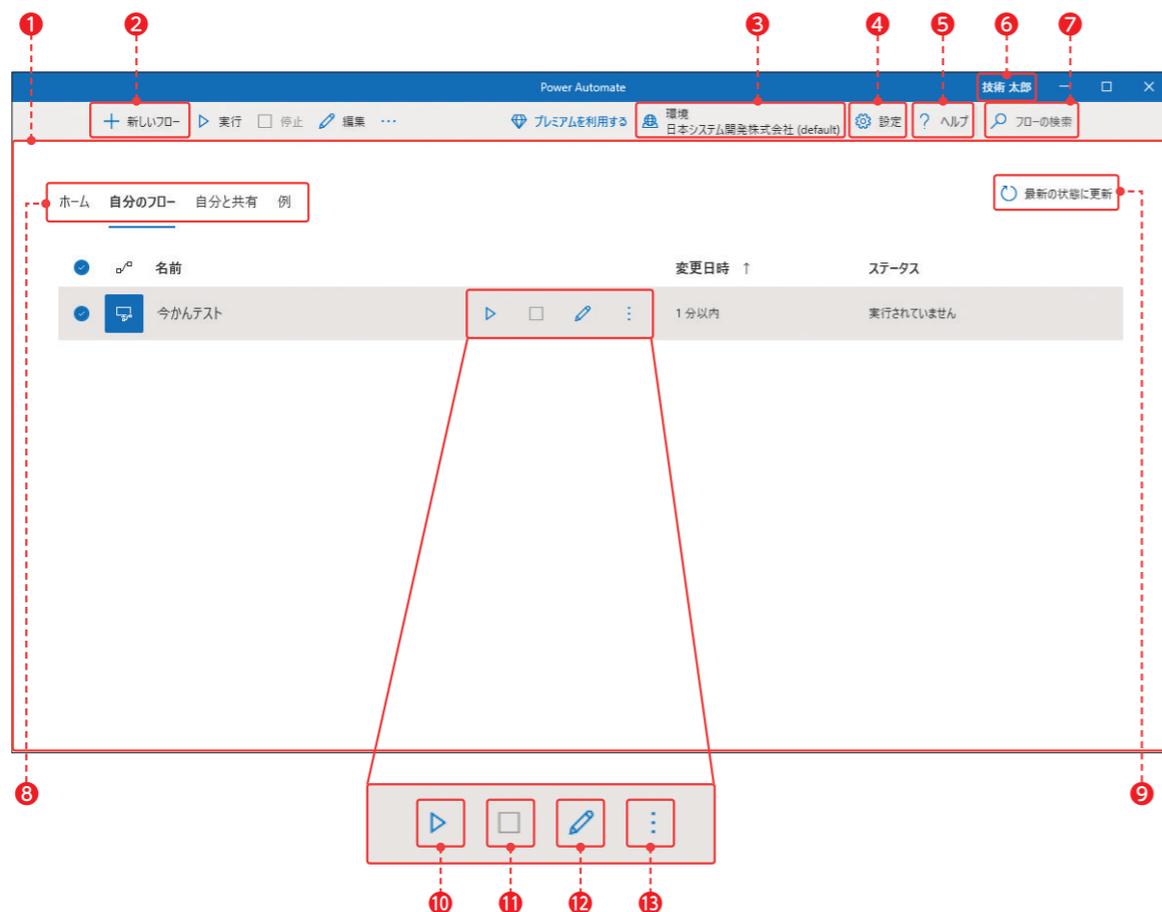
ここで学ぶこと

- ・フローコンソール
- ・画面構成
- ・コンソール設定

PADを起動したときに開かれる最初の画面を[フローコンソール]画面と呼びます。フロー作成の起点となる画面でもあります。ここでは[フローコンソール]画面の画面構成、コンソール設定について、詳しく説明します。

① [フローコンソール]画面の画面構成

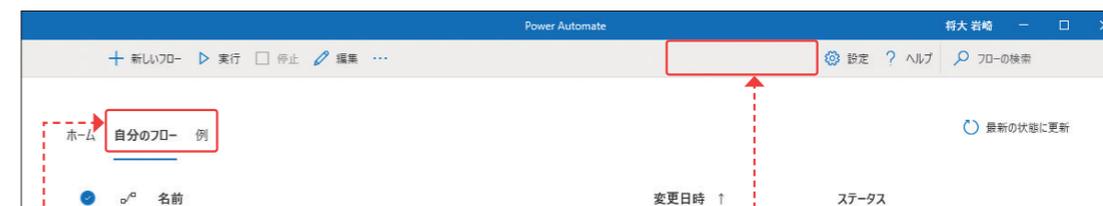
[フローコンソール]画面では、フローの新規作成、既存フローの実行や編集が行えます。また、PADの設定やサンプルフローの確認なども行うことができ、これらを使用していくうえで基準となる画面となっています。



①フローのリスト	フローの名称、変更日時、実行状態を確認できます。また、リストメニュー(⑧参照)の項目によってはホームやフロー例を表示します。
②新しいフロー	新規フローを作成できます。クリックすると[フローを作成する]画面が表示されます。
③環境	現在接続されている環境を確認できます。 ※組織アカウントのみ
④設定	コンソールの設定画面を表示できます。
⑤ヘルプ	ヘルプメニューを表示できます。
⑥ユーザー名	ログインユーザー名が表示されます。
⑦フローの検索	フローのリスト内を検索できます。
⑧リストメニュー	フローコンソール画面を[ホーム][自分のフロー][自分と共有][例]の4つから選択して切り替えることができます。標準では[ホーム]が選択されており、フローの実行や編集をするためには[自分のフロー]を使用します。 ※個人アカウントでは[ホーム][自分のフロー][例]の3つです。
⑨最新の状態に更新	リストメニューの[自分のフロー][自分と共有]において、フローのリストの表示を最新の状態にします。
⑩実行	フローを実行できます。
⑪停止	実行中のフローを停止できます。
⑫編集	クリックすると[フローデザイナー]画面が表示されます。
⑬その他のアクション	⑩~⑫を含むアクションに関するメニューを確認できます。

補足 アカウント種別による画面の違い①

Sec.04の手順にそってMicrosoft アカウントを作成した場合、アカウント種別が「個人アカウント」となります。その場合、本書での画面表示とは異なる点があります。



[自分と共有]がなく、[自分のフロー][例]の2種類のみとなっている [環境]の記載がない

⑥のログインユーザー名をクリックすると、ログイン中のメールアドレスの下に、組織アカウントの場合は「組織名」、個人アカウントの場合は「Microsoft」と表示されます。また組織アカウントの場合は[組織を切り替える]という切り替えメニューが表示されます。

組織アカウントの場合



個人アカウントの場合



Section

20

条件分岐とループを理解しよう

ここで学ぶこと

- ・条件分岐
- ・ループ
- ・演算子

ここでは、条件分岐とループについて解説します。それぞれいくつか種類があり、使用用途によって使い分けていきます。ここではよく使うものに絞り、解説していきます。

1 条件分岐の考え方と種類

▶ 条件分岐とは

条件分岐とはプログラムの命令文の1つです。身近な例として、日替わり定食(ランチ)があります。下記のように曜日ごとに定食が決まっているお店の場合、2023年6月6日はどの定食になるのでしょうか？ この日は火曜日にあたるため、B定食を食べられます。このように、ある一定のルールをもとに判断して処理を行いたい場合に条件分岐を使用します。業務では「この会社の場合は〇〇を行う」「ファイルが存在すれば〇〇を行う」といった作業や場面が当てはまります。



2023年6月6日は火曜日
よって今日はB定食!

▶ 種類

PADでは、アクションペイン内の[条件]グループを使用することで、条件分岐を行うフローを作成することができます。6つのアクションは大きく2つの条件分岐に分けることができます。

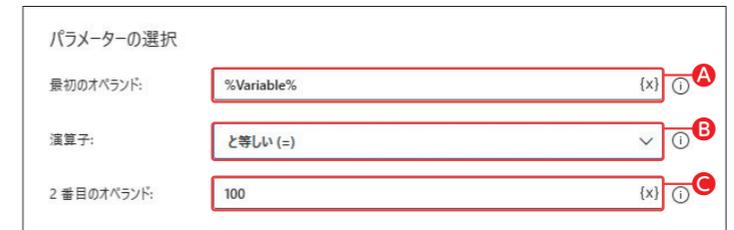


条件分岐	内容
1 if文	[If] [Else if] [Else]の3つのアクションを使用した分岐をプログラミング用語ではif文と呼びます。
2 switch文	[Switch][Case][Default case]の3つのアクションを使用した分岐をプログラミング用語ではswitch文と呼びます。

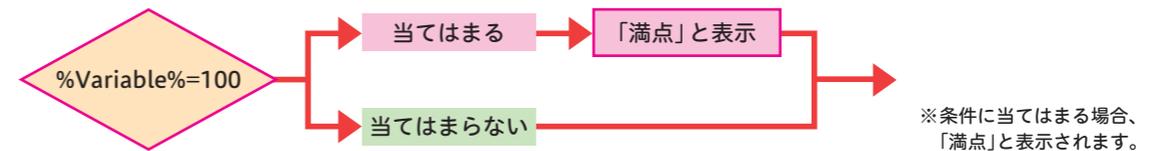
2 条件分岐：if文

▶ [If] アクション

[If] アクションはif文の基準となるアクションであり、使用することで「条件に当てはまる場合、〇〇の処理をする」という流れを作成することができます。右図の場合、「%Variable% Aは100 Cと等しい Bですか?」という比較をしており、この条件に当てはまる場合に特定の処理を行う流れ形になります。

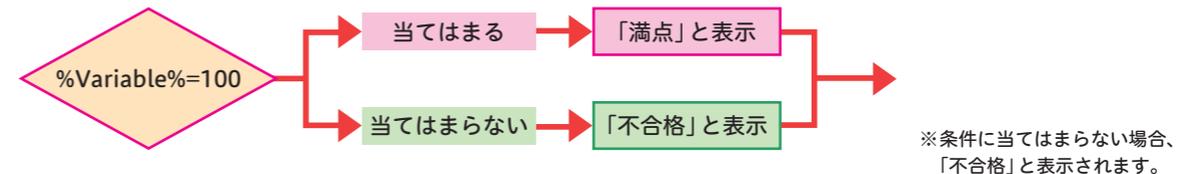


これをフローチャートで表すと、下図のようになります。if文の原型はこの形になるので、覚えておきましょう。



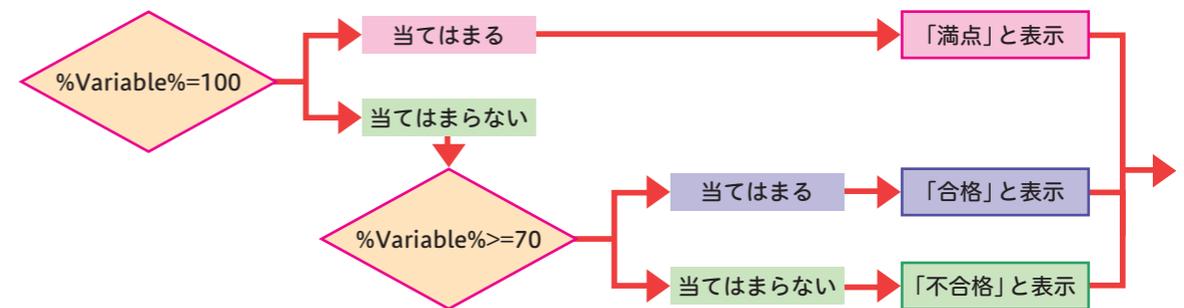
▶ [Else] アクション

[Else] アクションは、「条件に当てはまらない場合〇〇の処理をする」という流れを作成するためのアクションです(入力パラメータはありません)。そのため、[If] アクションで設定した条件外の場合に、なにか処理を行いたい場合に使用します。これをフローチャートで表すと、下図のようになります。プログラミング用語ではこのような形のものをif else文と呼びます。



▶ [Else if] アクション

[Else if] アクションは、「条件Aに当てはまらなかったが、条件Bに当てはまる場合〇〇の処理をする」という流れを作成するためのアクションです。条件を設定するアクションになるため、設定方法は[If] アクションと同じように設定します。これをフローチャートで表すと、下図のようになります。



Section 21

作成するフローを確認しよう

ここで学ぶこと

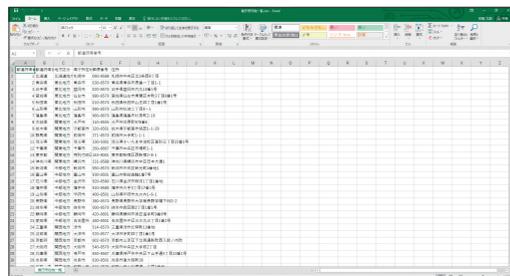
- ・ CSVデータの転記
- ・ 作成フロー
- ・ 繰り返し/分岐処理

本章では、練習用ファイル[県庁所在地一覧.csv]を利用して、このCSVデータをExcelへ転記、さらに地方を選択できるダイアログを表示して、東北地方や関東地方など、選択した地方のみをExcelへ転記するフローを作成します。

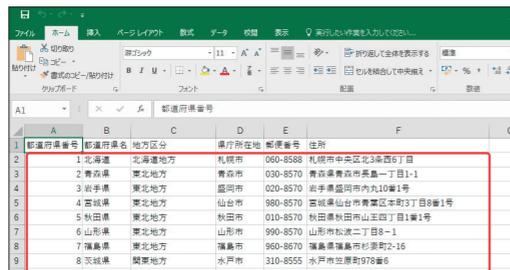
1 本章で作成するフロー

本章では、県庁所在地がまとめられたCSVデータをExcelに転記するフローを作成します。最終的には選択した地方のみ出力されるExcelファイルを作るため、一連の内容をマスターすることで、たとえば商品リストをカテゴリ別に分類して出力するなど、用途に合わせたフローも作成できるようになります。

1 [県庁所在地一覧.csv]からデータを取得



3 選択した地方に該当するデータを[県庁所在地一覧_ひな型.xlsx]へ転記

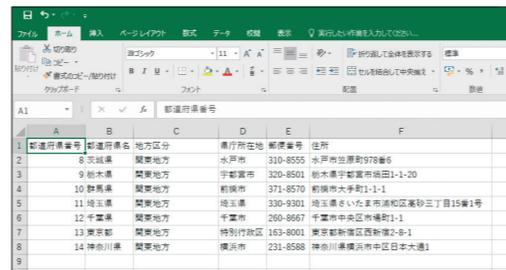


選択した地方のデータが2行目以降に転記される

2 地方選択ダイアログから出力したい地方を選択



4 転記後のデータを[県庁所在地一覧_結果.xlsx]として保存



なお、本章ではSectionをまたいだ状態で連続した手順として解説しています。そのため、アクショングループが展開されている場合は、そのことを前提で解説しています。

2 フローの作成順序

STEP1 県庁所在地データ1件の処理設定

Sec.22~25では、CSVのデータを読み取り、県庁所在地データ1件をExcelに転記して別名保存する処理を設定します。このSTEPが完了すると、県庁所在地データ1件を転記することが可能になります。

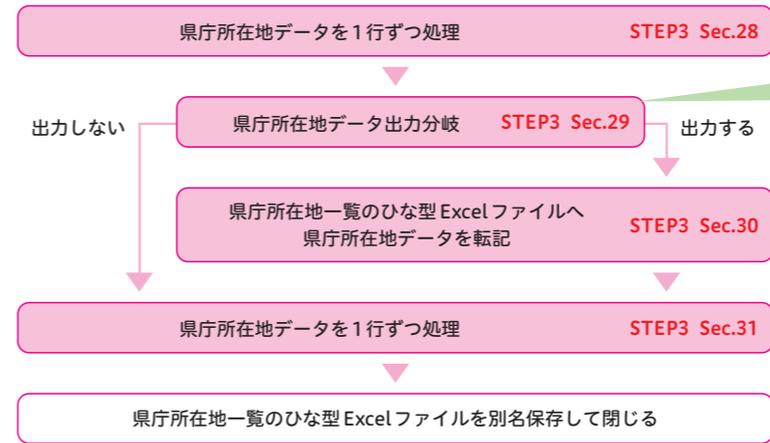
STEP2 地方区分リスト、選択ダイアログの設定

Sec.26~27では、地方区分データのリスト化および重複削除、転記する地方の選択ダイアログを表示する処理を設定します。このSTEPが完了すると、転記する地方名を選択し、県庁所在地データ1件を転記することが可能になります。この時点までのフローは下記のとおりです。



STEP3 繰り返し、転記分岐処理の設定

Sec.28~31では、県庁所在地データの1行ずつ繰り返し、県庁所在地データの地方名と選択した地方名との一致確認、一致した場合のみExcelに転記および転記する行の変更処理を設定します。このSTEPが完了すると、選択した地方名の県庁所在地データのみを繰り返し転記することが可能になります。



県庁所在地データの地方名が、選択ダイアログにて選択した地方名と同じであれば出力

選択した地方の全県庁所在地データを転記するため、1つの県庁所在地データを転記するたびに、転記行を変更

24

Excelファイルにデータを転記しよう

ここで学ぶこと

- ・貼り付け
- ・Excelファイル
- ・変数

Sec.22で取得したCSVファイルの内容を、Sec.23で開いたExcelファイルへ入力する方法を解説します。この方法を活用することで、CSVからExcelへの転記作業が自動化できるようになります。

① 指定したセルへの入力設定を行う

解説

{x} とは

データの転記を行うには、変数を利用します。PADでは、フロー内ですでに設定されている変数が存在する場合、{x}をクリックすることで変数名を選択することができます。この機能を使用することで、変数名の入力ミスなどを防ぐことができます。

1 [Excel] 内の [Excelワークシートに書き込む] をアクション2の下にドラッグ&ドロップします。



2 [書き込む値] の {x} をクリックします。



補足

Excelの列を指定する方法

ExcelにはA列、B列といった[列名]と、1列目、2列目といった[列番号]の2種類があります。PADで操作したいExcelの列を指定する場合、[列名][列番号]のどちらも使用することが可能です。本書では親しみやすい[列名]で説明します。

注意

数字の入力は半角で

アクションの設定時に数字を使用する場合は、基本的に半角数字を入力してください。仮に全角数字を入力した場合、テキストとして判断されてしまい、想定した動きにはなりません。たとえば[Excelワークシートに書き込む]アクションの列や行に全角数字を入力した場合、書き込みのセルを判断できずにエラーとなります。

解説

行に「2」を入力する理由

[県庁所在地一覧_ひな型.xlsx]の1行目に項目が記載されているので、手順6では「2」を入力しています。

	A	B	C
1	都道府県番号	都道府県名	地方区分
2			

② 指定したセルへデータを入力する

解説

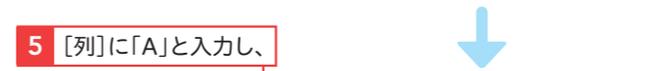
データの確認

ここでは、[県庁所在地一覧.csv]に記載されている内容をExcelのA2セルを基準に貼り付けました。データを確認する場合は、[県庁所在地一覧.csv]もしくは変数[CSVTable]の内容と比較してみてください。

3 フロー変数内の[CSVTable]をクリックし、



4 [選択]をクリックします。



5 [列]に「A」と入力し、



6 [行]に「2」と入力して、

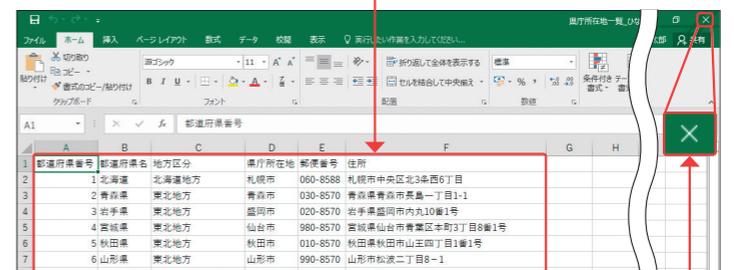
7 [保存]をクリックします。

1 [保存]をクリックし、

2 [実行]をクリックします。



3 実行後[県庁所在地一覧_ひな型.xlsx]に各都道府県が記載されていることを確認します。



4 確認後、[X]をクリックしてExcelを閉じます (Excelは保存しないので、表示される確認画面では[保存しない]をクリックします)。

Section

34

請求書に基本情報を
転記しよう

ここで学ぶこと

- Excel インスタンス
- コピー (複製)
- ここから実行

ここでは、Sec.33 で設定した情報を [請求書_ひな型.xlsx] に自動で転記する方法を解説します。ここでも同じような操作の繰り返しがあります。根気よくミスないように操作してください。

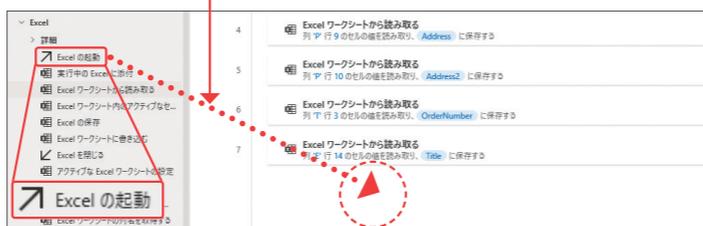
1 別の Excel の起動設定を行う

解説

[Excelの起動] アクションを複製

この手順 1 では、[注文書01.xlsx] とは別のファイルである [請求書_ひな型.xlsx] を開く設定を行っています。Excel インスタンスは、1つの Excel につき1つというルールがあるため、再度 [Excelの起動] アクションの設定を行っています。

1 [Excel] 内の [Excelの起動] をアクション7の下にドラッグ&ドロップします。



2 [Excelの起動] の ▾ をクリックし、



3 [次のドキュメントを開く] をクリックします。

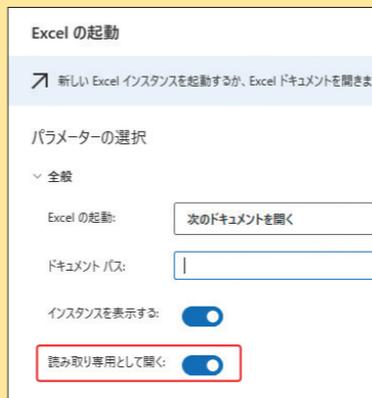
4 [ドキュメントパス] の [x] をクリックします。



★ 応用技

Excel を読み取り専用として開く設定

Excel を開く際、読み取り専用として開くことが可能です (P.142 の手順 4 の画面参照)。[読み取り専用として開く] の設定を行うことで、読み取り専用として Excel を開き、内容を変更されない設定にすることができます。



解説

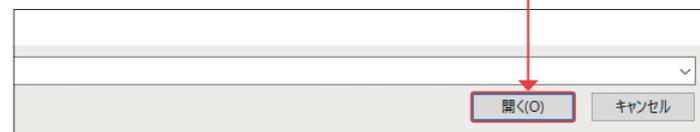
変数名の変更

デフォルトの変数名 [ExcelInstance] では、どの Excel インスタンスなのか分かりづらいので、ここでは、「請求書の Excel」を意味する [Invoice_ExcelInstance] という変数名に変更します。

5 [デスクトップ] をクリックし、[サンプルデータ] → [請求書作成] → [04_ひな型] の順にダブルクリックして進み、[請求書_ひな型.xlsx] をクリックします。

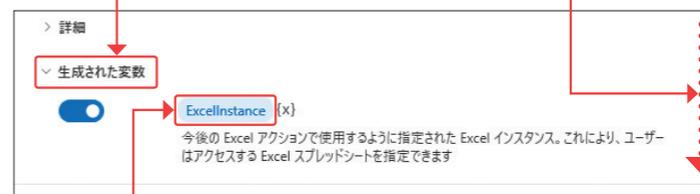


6 [開く] をクリックします。



7 下にスクロールし、

8 [生成された変数] をクリックして、



9 [ExcelInstance] をクリックします。

10 [Invoice_ExcelInstance] と入力し、



11 [保存] をクリックします。

45

Webサイトに
ログインしよう

ここで学ぶこと

- ・ UI 要素
- ・ Web ブラウザー インスタンス

トレーニングサイトにアクセスすると最初にログインページが表示されます。このボタンをクリックしてログインIDを入力するなど、Webサイトのログインに必要な操作部分の設定を行っていきます。

① ボタンをクリックする設定を行う

解説

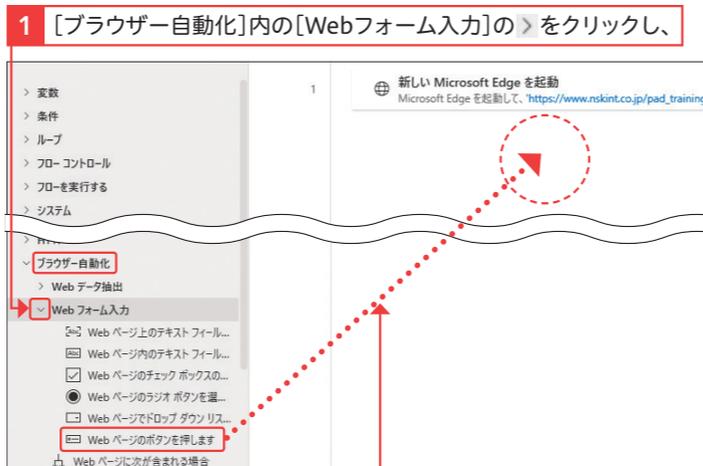
Webフォーム入力

ここでは、ログインページを表示し、ログインIDとパスワードを入力してログインします。アクションペインの[Webフォーム入力]には、入力欄に文字列を入力するアクションやボタンをクリックするアクションなど、Webフォーム入力に関するアクションがグループ化されてまとまっています。操作内容がそのままアクション名になっているので直感的な操作が可能です。

補足

Webブラウザインスタンスの設定

手順③の前に[Webブラウザインスタンス]で処理対象のWebブラウザを設定します。ここでは処理対象のWebブラウザが1つのため、デフォルトの「%Browser%」のまま進みます。処理対象のWebブラウザが複数存在する場合は、ドロップダウンリストから処理対象のWebブラウザインスタンスを選択します。



1 [ブラウザ自動化]内の[Webフォーム入力]の > をクリックし、

2 [Webページのボタンを押します]をアクション1の下にドラッグ&ドロップします。

3 [UI要素]の右にある▼をクリックします。



補足

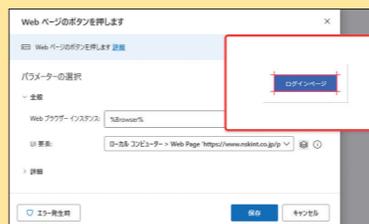
要素取得の方法

処理対象の要素を取得する方法は、処理対象にマウスマウスカーソルを合わせて赤枠に囲まれた状態で[Ctrl]を押しながらクリックします。赤枠に囲まれていないと要素を取得できず、[Ctrl]を押さないでクリックすると要素取得ではなく通常のクリック処理になってしまうので注意してください。

補足

要素取得後の動き

要素取得が完了すると自動で[UI要素]に取得した要素が設定されます。[UI要素]の右側にあるアイコン👁️にマウスカーソルを合わせると設定している要素のキャプチャが表示されるので、設定している要素を確認することができます。



4 [UI要素の追加]をクリックします。



5 Webブラウザの[ログインページ]のボタンを[Ctrl]を押しながらクリックします。



6 [保存]をクリックします。



7 ✕をクリックして、トレーニングサイトを閉じます。



53

Outlookでメールを送信しよう

ここで学ぶこと

- ・ Outlook
- ・ 新規メール
- ・ Outlook インスタンス

ここではメールソフトであるOutlookを利用して、新規のメールを自動で送信する設定を解説します。同時に複数の宛先へ送信することもできるので、いろいろな用途に活用できます。

1 新しいフローを作成する

解説

フロー名の設定

ここでは、Outlookでメールの送信や受信を行うフローを作成します。そのため、わかりやすい名前として「メールの送信・受信メール確認」と設定します。

重要用語

Outlook インスタンス

Excelを起動する際にExcelインスタンスが設定されるのと同様に、Outlookを起動する際にもOutlookインスタンスが設定されます。Outlookを処理するアクションを設定する際は、Outlookインスタンスの設定が必要です。なお、Outlookが起動済みの状態で「Outlookを起動します」アクションを実行すると、新規起動は行わず、起動済みのOutlookを対象にインスタンスを設定します。これは「実行中のExcelに添付」アクションや、Webブラウザ起動アクションの「起動モード」で「実行中のインスタンスに接続する」を設定した場合と同じ動きです。

1 「フローコンソール」画面で「新しいフロー」をクリックします。



2 「フロー名」に「メールの送信・受信メール確認」と入力し、



3 「作成」をクリックします。

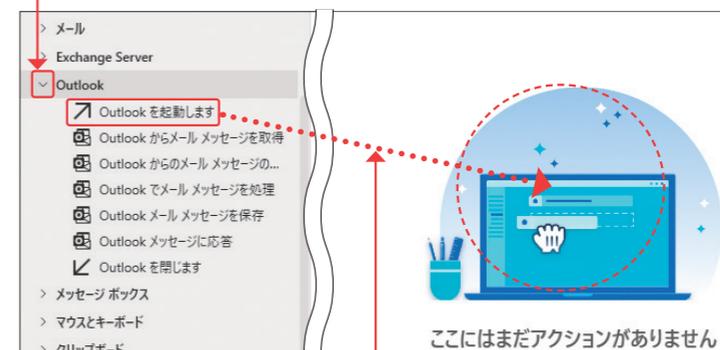
2 Outlookを開く設定を行う

解説

Outlook アクショングループ

アクションペインの「Outlook」には、Outlookメールの内容を取得するアクションや、Outlookメールを送信するアクションなど、Outlookに関するアクションがグループ化されています。操作内容がアクション名になっており、Outlookを起動する設定には「Outlookを起動します」アクションを使用します。

1 「フローデザイナー」画面で「Outlook」の▼をクリックし、



2 「Outlookを起動します」をワークスペースにドラッグ&ドロップします。

3 「保存」をクリックします。



3 PADでOutlookを開く

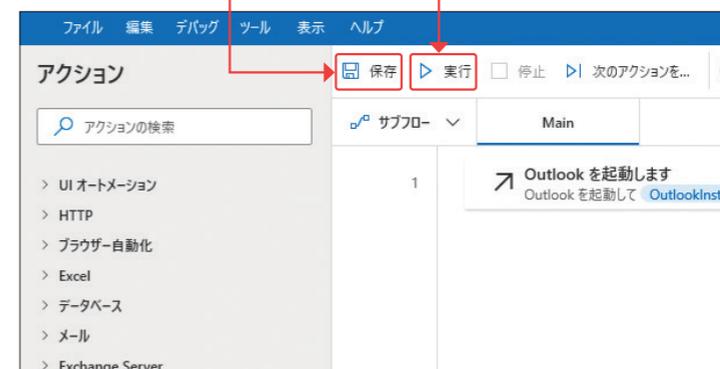
解説

Outlook インスタンスの確認

Outlookが開かれていることを確認するだけでなく、Outlookインスタンスを意味する変数「OutlookInstance」にインスタンスが設定されているか、変数ペインに存在する「OutlookInstance」をダブルクリックして確認してください。「プロパティ」に「OutlookInstance」、[値]に「Outlookインスタンス」と表示されていれば問題ありません。

1 「保存」をクリックし、

2 「実行」をクリックします。



3 Outlookが開くことを確認し、閉じます。